

令和 5 年 6 月 6 日現在

機関番号：24501

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2022

課題番号：18K00578

研究課題名（和文）節の切り詰め効果に関する研究：局所性制約に基づく説明の発展・深化に向けて

研究課題名（英文）A study of the truncation effect of clauses: toward the development and deepening of explanations based on locality constraints

研究代表者

那須 紀夫 (Nasu, Norio)

神戸市外国語大学・外国語学部・教授

研究者番号：00347519

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、日本語における節の切り詰め効果をもたらす要因の解明に向けて、文頭要素と文末要素の呼応関係の分析を中心に分析を行った。その結果、節の左端部に現れる文副詞および話題要素の分布が、節の右端部に現れる話者指向モダリティと、述語の活用形に影響を与える機能範疇主要部に左右されることが判明した。このことから、日本語では主要部移動にかかる局所性制約が切り詰め効果に一定の影響を及ぼすことが確認された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究のテーマは、節の切り詰めをもたらす文法的要因の解明である。SVO 言語を対象とする従来の研究では、切り詰め効果は節の左端部における句要素の移動によって説明されてきた。しかし、SOV 言語である日本語では、階層構造は文の右端部により顕著に現れる。左端部と右端部の対応関係に着目した本研究のアプローチによって、SOV 言語では右端部の主要部が切り詰め効果に影響することが判明した。これによって、理論上の欠落部分が補完されることが期待できる。

研究成果の概要（英文）： This study analyzed the relationship between sentence-initial and sentence-final elements to elucidate the factors that cause the clausal truncation effect in Japanese. The distribution of sentence adverbials and topic elements appearing on the left periphery of the clause is influenced by items occurring in the clausal right periphery, such as the speaker-oriented modality and the functional heads affecting the predicate conjugation. This confirms that the locality constraint on head movement affects the truncation effect in Japanese.

研究分野：統語論

キーワード：切り詰め効果 呼応関係 補文標識 活用形 話題化 文副詞

1. 研究開始当初の背景

節の外縁部で起こる現象の容認度をめぐって、従属節の間には違いが見られる。節構造の研究では、この違いが従属節のサイズを測る指標として用いられてきた。容認可能な現象が多ければ多いほど、サイズの大きな節となり、逆に容認される現象が少なければ、より小さく切り詰められた構造を持つ節ということになる。この傾向を便宜的に切り詰め効果と呼ぶ。

切り詰め効果にどのような理論的説明を与えるべきかについては複数の説がある。有力な説として、節の普遍的な雛形を想定し、節ごとにサイズを指定するアプローチと、切り詰め効果を移動の局所性制約から導き出そうとするアプローチがある。しかしながら、両者にはそれぞれ問題がある。前者のように節構造の雛形を所与のものとして規定するだけでは、節構造の多様性が生じる仕組みについて原理的な説明を与えることができない。一方、後者は切り詰め効果を演算子移動に課される局所性制約に結びつけて説明しようとするが、演算子移動が起こらない節であっても切り詰め効果があることが分かっており、演算子移動のみを切り詰め効果の原因とすることは疑問が残る。

2. 研究の目的

本研究の目的は、上述の背景を踏まえ、節の切り詰め効果をもたらす文法的な要因を解明することである。従来提案されてきた分析のうち、移動の局所性制約に基づく分析（局所性分析）を採用し、先行研究の不備を補いつつ、分析を発展・深化させることによって、より説得力のある理論を構築することを目指す。

従来の局所性分析では、一部の研究を除くと節の左端部に生起する句要素の移動に焦点が当てられてきた。しかしながら、移動の局所性は句の移動だけでなく主要部の移動にも見られる性質である。もし節サイズの多様性が移動の局所性から導出されるのであれば、句の移動に加えて主要部の移動が切り詰め効果の原因となる可能性も十分考えられる。そこで本研究では、切り詰め効果の原因となる移動のタイプが言語ごとに異なるという仮説を立て、その立証を試みるとともに、そのような言語差をもたらす文法的要因の特定を目指した。

3. 研究の方法

目的の達成に向けて、本研究では次の3つの課題に取り組んだ。

課題（A）主要部移動が節の構築に果たす役割の解明

主要部移動が切り詰め効果をもたらす可能性を検討するにあたり、活用形と主要部移動を連動させる分析（三原 2015）に着目する。この分析では、述語は主要部移動の対象となり、着地点になる機能範疇のタイプに応じて活用形が決まると考えられている。本研究では大筋でこの分析を採用し、主要部移動と切り詰め効果の相関性を立証することを目指す。

課題（B）文副詞の分布を決定する要因の解明

切り詰め効果を主要部に絡めて説明する分析の有効性を、文副詞の分析を基に検証する。文副詞は節サイズを反映する現象の1つであるが、その分布には言語差が見られる。例えば英語の条件節には評価の文副詞が生起できないが、日本語の条件節では可能である。本研究では日英語の

文副詞の分布を網羅的に比較し、日本語の文副詞の分布が演算子移動ではなく述語の主要部移動に左右される可能性を追求する。特に文副詞と述語の呼応関係に着目し、文副詞の分布と述語形態の分布がともに節構造を反映していることを立証する。

課題 (C) 局所性制約のタイプをめぐる言語差が生じる原因の特定

切り詰め効果が演算子移動によってもたらされる言語と主要部移動によってもたらされる言語の区別が、どのような文法的要因に基づくものなのかを検討する。前者に該当する英語と後者に該当する日本語は、生成理論で論じられてきた代表的なパラメータのうち、wh-移動の有無、主要部と補部の順序、主要部移動の有無の3つに関して対照的な特徴を示す。この3つのパラメータが切り詰め効果をめぐる言語差に何らかの影響を与えているとの仮説から出発し、その妥当性を検証する。

4. 研究成果

本研究の成果は以下の通りである。

(1) 日本語の文末要素と文の階層構造の相関性を明らかにするための具体的な方策として、述語活用形と機能範疇主要部の結びつきに着目し、活用形と句構造の相関関係を論じた三原(2015)等の研究で提案された分析を批判的に検討した。先行研究では述語が複数連結した場合の句構造について言及されていない。本研究ではそのような事例を取り上げた。特に、動詞述語ないしは形容詞述語に助動詞が連結した構造、および述語と接続助詞が結合した構造に焦点を当て、出現しうる機能範疇主要部の種類を特定するとともに、結合体が単文構造なのか複文構造なのかを精査した。(課題 (A) に関連)

(2) 文頭要素と文末要素の相関関係を解明するため、文副詞の分布を左右する統語的な条件について検討した。まず、文副詞の分布を移動の局所性条件に基づいて説明しようとする Lilian Haegeman らのアプローチが、日本語にはあてはまらないことを立証した。弱い島を形成しない日本語の副詞節ではそもそも空演算子の移動が起こらないため、副詞節に文副詞が生起できない事実を文副詞による演算子移動の阻止に結び付けて説明することができない。代案として、本研究では、文副詞の分布が文末に現れる話者指向の助動詞およびその活用形との呼応関係によって決定されるとの分析を提案した。(課題 (B) に関連)

(3) 節の左端部要素と右端部要素の呼応関係が、文副詞以外の左端要素にも機能することを示した。具体的には、左端部要素である話題要素の生起が、話者指向の助動詞およびその活用形との呼応関係に左右されることを明らかにした。ただし、当初の仮説を修正し、重要なのは活用形そのものではなく、Force 部門を持つ CP 領域が備わっていることであるとの結論に至った。終止形述語を持つ節には必ず Force が存在するので話題化は常に可能である。一方、連体形述語が現れる節では、Force が存在する場合には話題化が許されるが、存在しない場合には話題化が不可能であることが判明した。このことから、次の2つの見解が支持されることになった。1つは Force の存在が話題要素の認可に関与していること、2つ目は話題化が阻止される節は Force を欠く切り詰め構造をしていることである。(課題 (A) (B) に関連)

(4) 当初の予測に反して、切り詰め効果が演算子移動によってもたらされる言語と主要部移動によってもたらされる言語という二分法が妥当ではなく、むしろ補文標識の実現パターンに見られる言語差が節構造に影響を与える可能性が高いことが判明した。

分裂 CP を構成する主要部に対応した有形の補文標識を持つ日本語のような言語では、補文標識の分裂はレキシコンの中で達成されている。一方、補文標識の分化が貧弱な英語のような言語では、CP 関連部門の情報が 1 つの補文標識に集約・融合しており、補文標識の分裂は統語部門で起こる。この違いの帰結として考えられるのは、英語のような言語では CP 分裂に課される統語的な制約が働くのに対して、日本語のような言語はそのような制約を免れるということである。(課題 (C) に関連)

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 NASU, Norio, Takayuki Akimoto, Koji Shimamura, Yusuke Yoda	4. 巻 1
2. 論文標題 The categorial status of embedded questions in Japanese	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Proceedings of the 13th Generative Linguistics in the Old World in Asia (GLOW in Asia XIII)	6. 最初と最後の頁 197-210
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 NASU, Norio	4. 巻 1
2. 論文標題 On the Cause of Failed Root Transformations	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Proceedings of the 15th Workshop on Altaic Formal Linguistics	6. 最初と最後の頁 121-132
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 NASU, Norio	4. 巻 130
2. 論文標題 Adverb-Predicate Agreement in Japanese and Structural Reduction	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Arbeitspapier: Proceedings of the Workshop Clause Typing and the Syntax-to-Discourse Relation in Head-Final Languages	6. 最初と最後の頁 91-121
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 0件/うち国際学会 4件）

1. 発表者名 NASU, Norio, Takayuki Akimoto, Koji Shimamura, Yusuke Yoda
2. 発表標題 The categorial status of embedded questions in Japanese
3. 学会等名 The 13th Generative Linguistics in the Old World in Asia (GLOW in Asia XIII)) (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 那須紀夫・依田悠介・秋本隆之
2. 発表標題 日本語右端部に出現する「の」の特性 : Saito (2012) 再考
3. 学会等名 Morphology & Lexicon Forum 2021
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 NASU, Norio
2. 発表標題 Parametric Variations in the Licensing of Left Periphery Elements
3. 学会等名 The 12th International Workshop on Theoretical East Asian Linguistics (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 NASU, Norio
2. 発表標題 The Cross-Linguistic Variation in the Cause of Failed Root Transformations
3. 学会等名 The 15th Workshop on Altaic Formal Linguistics (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 NASU, Norio
2. 発表標題 Adverb-Predicate Agreement in Japanese and Structural Reduction
3. 学会等名 Clause Typing and the Syntax-to-Discourse Relation in Head-Final languages Workshop (国際学会)
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------